

2 南大門の歴史

(1) 興福寺創建と南大門

南大門の造営時期は史料に明徴を欠き、上限を明らかにしないが、その下限は『興福寺流記』（以下、『流記』）にうかがえる。『流記』が引用する奈良時代の資財帳「天平記」は、南大門の規模を「間別一丈五尺。廣二丈八尺」とし、南大門の獅子像および金剛力士像については「内左右師子形。惣金色。外左右金剛力士。惣緑色。」と述べる。また、「門守屋二間。在門外左右云云。東西在曲殿。各有脇門云云。」と記し、門前に守屋や曲殿があったことを伝えている。つまり、「天平記」が記された時点で、南大門はすでに完成していたのが明らかである。

澁谷和貴子は、『流記』が引用する「天平記」の成立を天平2年（730）をあまり下らない頃とする（澁谷和貴子『『興福寺流記』について』『佛教芸術』160、1985）。この説に信をおく場合、南大門の完成は天平2年が一応の下限となろう。一方、毛利久は『流記』が伝える「天平記」・「天平十六年記」などを同一視し、回廊・南大門の下限を天平16年（744）とするが、実際には中金堂とほぼ同時の完成を考えている（毛利久「興福寺伽藍の成立と造像」『佛教芸術』40、1959）。中金堂に安置された弥勒浄土群像は養老5年（721）8月の作で、このときが中金堂完成の下限である。南大門の完成は中金堂の完成にやや遅れたであろう。

(2) 平安期～近代の南大門

『春日社寺曼荼羅図』（室町時代末）などにみえるように、興福寺南大門は壇正積基壇の上に建つ5間幅の重層建物で、中央3間分が通路であったことが知られている。通路の左右には金剛力士像が南面して立ち、『興福寺曼荼羅図』（平安時代末～鎌倉時代初頭）がその像容を詳しく伝えている。このように、興福寺の正門として偉観を誇った南大門であるが、中金堂・回廊・中門などと時を同じくして七度火災に遭い、六度再建された歴史をもっている。南大門の罹災と再建は次のごとくである（第2表）。南大門の第1次～第3次焼失は11世紀中頃～後半のことで、火災のたびにすぐ再建をおこなっている。しかし治承4年（1180）12月、平重衡の南都焼き討ちにより、興福寺は東大寺とともに未曾有の災厄に見舞われた（第4次焼失）。第5次焼失は建治3年（1277）7月、第6次焼失は嘉暦2年（1327）3月である。この後約400年にわたり、中金堂院と南大門とは火災を免れていたが、享保2年（1717）の第7次焼失で灰燼に帰した。以来、堂宇再建は進まず、南円堂が寛政9年（1797）に、中金堂仮堂が文政2年（1819）に再興したほかはついに再建されなかった。寛政3年（1791）刊『大和名所図会』は、建物をう

第2表 南大門の焼失と再建

焼失				再建			
第1次	永承元年（1046）	12月24日	①	第1次	永承2年（1047）	7月18日	（南大門ほか上棟）②
第2次	康平3年（1060）	5月4日	③	第2次	治暦3年（1067）	2月25日	（興福寺供養）④
第3次	嘉保3年（1096）	9月25日	④	第3次	永長2年（1097）	2月11日	（諸堂上棟）④
第4次	治承4年（1180）	12月28日	⑤	第4次	文治3年（1187）	7月13日	（南大門上棟）⑥
第5次	建治3年（1277）	7月26日	⑦	第5次	弘安2年（1279）	10月26日	（金堂ほか上棟）⑧
第6次	嘉暦2年（1327）	3月12日	⑨	第6次	正平4年（1349）	10月27日	（南大門上棟）⑩
第7次	享保2年（1717）	1月4日	⑪	—			

①『興福寺流記』 ②『造興福寺記』 ③『康平記』ほか ④『中右記』ほか ⑤『玉葉』・『山槐記』 ⑥『春日神社文書』 ⑦『中臣祐賢記』 ⑧『勘仲記』
⑨『法隆寺別当次第』 ⑩『興福寺文書』 ⑪『塩尻』

しなった壇正積基壇の上に、簡素な釘貫門と築地塀とを描く。

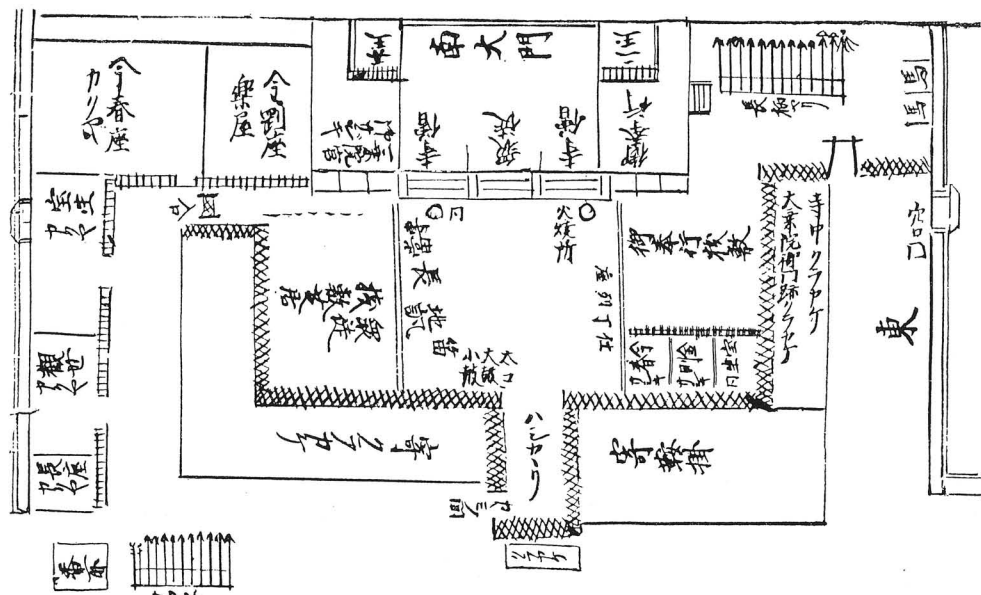
享保の焼失以来、南大門を含む伽藍の再興が幕末まで企図されていたことからみて、その基壇が大きく改変を蒙るのは明治期の廃仏毀釈以降と考えねばならない。明治4年(1871)の寺領没収、翌5年の廃寺確定ののち、寺内の堂宇・土塀が取り壊され、興福寺は大いに荒れた。明治6年には、時の県令・四条隆平が南大門の基壇上に遥拝所を設置したが、その撤去が奈良県から許可されたのは明治21年(1888)4月のことである。このとき、興福寺は還仏会を執行し、寺の復興がようやく実現している。興福寺はその後「境内地に築地塀めぐらす計画を立て、その土取りには境内地のほか東金堂東手の丘を切り崩すこととして出願許可された」という(奈良公園史編集委員会編『奈良公園史』奈良県、1982)。発掘調査で判明したように、南大門の基壇は近代に大きく削られており、それとの関連が想起される。なお、南大門の東西に現存する築地塀は明治27年に寺域画定のため興福寺が築いたものである(藪中五百樹「明治時代に於ける興福寺と什宝」『立命館大学考古学論集』Ⅲ、2003)。

(3)南大門の年中行事

南大門前の広場は、興福寺にかかわる芸能や宗教的催事場として有名である。門前で神事芸能には薪御能があり、春日若宮御祭も門前を「衆徒蜂起」・「南大門交名」の場として用いる。このほか、今は途絶えたが近世までは心経会があった。ここでは村井古道(1681～1750)著『南都年中行事』を中心に、南大門とその門前における薪御能の空間利用をみてみよう(第2図)。

薪御能のはじまりは、東西金堂でおこなった修二会の呪師猿楽である。修二会は国家安全・五穀豊穡・払除厄災を祈る法会で、呪師猿楽はその祈りを芸能として表現したものという。その後、呪師猿楽は修二会との分離が進み、室町期に薪猿楽(薪御能)となった(安田次郎『寺社と芸能の中世』山川出版社、2009)。本来は旧暦2月の行事であったが、一度の廃絶を経て、今は5月の行事である。

薪御能の舞台は、南大門の南側にある「般若芝」である。第2図によれば、寺僧・衆徒は三間幅の南階段を上ったところに、奉行および一乗院宮は金剛力士像の前に着座し、基壇の上から能を観賞したことがうかがえる。また、舞台の東側には奉行の棧敷、西側には衆徒の棧敷を仮設し、その背後には金剛・金春・宝生・観世の4座が楽屋を設けていた。こうした情景は、『大和名所図会』などにも描かれており、薪御能が南大門とその門前とをほぼ占拠する一大行事であったことがわかる。(森川 実)



第2図 薪御能舞台見取り図(『南都年中行事』より)

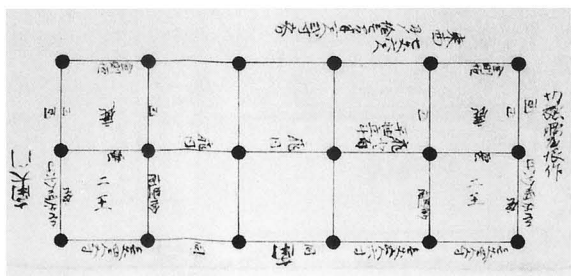
(4)南大門の建築

創建期の南大門については『流記』に記述がある。「南大門一字 五間、中三間有戸、間別一丈五尺、広二丈八尺、天平記延暦記并同之、宝字記云、長七丈八尺、広三尺、加端皆用裁金銅云云、天平記云、金泥裁銅云云、内左右師子形、総金色、外左右金剛力士、宝字記云、左右侍立石、分別内外矣、又云狭門二口云云、天平記云、門守屋二間、在門外左右云云、東西在曲殿、各有脇門云云、延暦記云、東西側在曲殿云云」。すなわち桁行5間で中央3間に扉がつき、柱間寸法に関しては天平記・延暦記と宝字記では齟齬がある。また天平記によると、門扉内の左右には金色の獅子が、門扉外の左右には金剛力士が安置されていた。門外の左右には門守屋のほか曲殿があった。柱間寸法に関しては、大岡實による解釈があり、記載が中門と類似することから、桁行中央3間が16尺、両端間が15尺、梁行14尺で、中門と同規模と想定されていた(『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966年、50頁)。

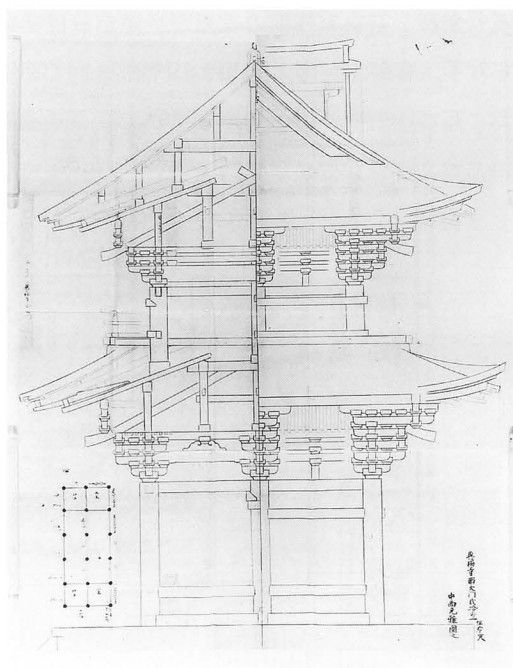
1998年におこなった中門の発掘調査では、上記の通りの遺構を確認することができ、大岡の推定を裏づけた(『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 I』興福寺1999年)。しかし、南大門に関しては疑問が残る。すなわち大岡も古絵図類から中門は単層切妻造、南大門は重層入母屋造と想定しているが(『南都七大寺の研究』288～289頁)、重層建築の場合、桁行両端間と梁行の柱間寸法を等しくするのが常套だからである。したがって宝字記の「広三尺」を「広三丈」の誤記と解釈すれば、梁行が15尺等間で、桁行は中門と同じく中央3間が16尺、両端間が15尺と考えられる。

いっぽう享保焼失以前の実測図である『興福寺建築諸図』(東京国立博物館蔵)には、中金堂院の平面図に南大門も描かれ(第3図は南大門部分のみ)、また南大門の建地割図(立断面図、第4図)も残る。建地割図にも小さく平面図を載せるが、それらによると南大門の平面は桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行中央3間が「壺丈五尺五寸」、桁行両端間と梁行が「壺丈四尺五寸」とあり、第3図には桁行総長(「東西」)は「七丈六尺」の書き込みがある。中央3間の棟通りには「扉北二開」とあり、両端間の門扉外側には「二王」、門扉内側には「獅子」の記載があり(第3図では「鹿」と書く。第4図の平面図では「獅子」)、創建期の安置形態が近世まで維持されていたと推定される。中央3間の扉は「北開」。また建地割図からは応永再興時の南大門の構造が判明する。重層入母屋造の建築で上下層とも三手先組物だが、古代の形式と異なり、応永年間に再興された現存する東金堂や五重塔などとも違って特異である。二重の柱は初重の垂木上に置いた柱盤上に立つ伝統的な形式。中世の二重門は現存遺構も少なく、その点でも貴重な資料である。

(箱崎和久)



第3図 『興福寺建築諸図』所収の南大門平面図



第4図 『興福寺建築諸図』所収の南大門建地割図